

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻116号 平成25年7月1日発行

「修身教授録」探求 (第八十一回) 立志

森 信 三

この道や遠く寂しく照れ、ども

いゆき到れる人かつてなし

赤 彦

■赤彦について
(以上教室に御入りになって無言にて書かる)

こゝにも書いた様にこの歌は島木赤彦という人の詠んだ歌ですから、始めにちよつと赤彦という人について申しましょう。島木赤彦は学歴としては僅に長野師範を出ただけであります。そういう意味で諸君が志を立てる上に最も手近かな手掛りになる人かと思ひます。師範を出ただけで日本文学史上に不滅の足跡を残した人としては、先づ赤彦を以て第一とすると言つてよいでしょう。大正十五年に亡くなつたんですから、今から十三年前には諏訪湖畔にいて、その鼻の孔を呼吸が出入りしていた訳です。

赤彦について研究するには「赤彦全集」があります。しかし諸君としては先づ岩波文庫にある「赤彦歌集」、あれが諸君には一番手近かでしょう。その他に「島木赤彦追悼号」というものが「アララギ」の増刊号として出ていますが、これは今では絶版でちよつと手に入りにくいでしょう。なおその外にも赤彦を知る手掛りとしては、「山房漫語」とか「赤彦童謡集」などというものがあります。前者

は赤彦の教育観を窺うべきものであり、後者は国民教育上最も大切な童謡です。

■人物を観るには追悼録を

ところで諸君のうち大部分の人は既に人生の三分の一を空費しているといつてよい。そこで空費した過去の二十年が真に惜しくてたまらぬという念が心の底から湧いて来ない限り、真に人生のスタートを切ることは出来ないでしょう。(この時クスクスと笑う者あり)マア諸君のこれ迄受けて来た教育はその程度のもんです。自分の一生の浮沈の話をされていながら笑うことしか出来ない。實際情けなくつて叱る気にもなれません。(と先生長歎息をされるれば、さすがに笑いの声を断つて一同肅然となる)それから序ですが、一個の人物を知るには先づその人の追悼録を見る事が手早いようです。そこからして又一步を進めて申せば、自分の尊敬する人ないし親しい人が亡くなられたら、その方の追悼録を編むということがお互いの務めといつてよいでしょう。人間の精神というものは文字を借らなければその委曲は後に伝わらないものです。勿論直接には生前その人に接した人の心に残り、又形としては事業の裡にこもる訳ですが、しかし精神の真の伝承ということにはそれだけでは不十分で、どうしても文字を通してその人の思想言動を残すということが非常に大切な事柄であります。実際、孔子・釈迦・キリストなどの偉大さも、その言行を録した「論語」「阿含経」

「聖書」などがなくては十分には伝わらなかつたといつてよいでしょう。人生というものはこの様に一步步々真実に刻み込んで行かねばならぬものです。實際人生は厳肅そのものです。(この時また生徒のうちに笑う者あり。思うに先生の態度言動がこれ迄のいわゆる修身教授という型から全く掛けはなれているからであらう。しかも先生一向に怒られる処か、却つて微笑さへも湛えられて「マア諸君も笑えるウチに笑つておくことです。そのうちにやがて笑い度くも笑えなくなりますからナア」と言われる。)

■立志とは

さて諸君はすでに本校に入つた以上、将来教育者たらんとする志を立てた上での事に相違ない。従つて今そういう諸君に向つて、更に志を立てよ等ということは、或いは不思議に感ずる人もありましょう。しかしながらひと口に志を立てると云つても、そこには色々程度の差があります。實際人間の偉さというものは、その人が如何なる志を立てそれを如何程実現するかによつて決まるといつてよいでしょう。否更に突きつめて申せば、抑々人間真の志というものは、その人の希う程度だけは必ず実現するものだといつてもよいのです。即ち凡そ一人の人間が真に深く心に念ずる事柄は、必ずや何時かは何等かの形で実現せられるものであります。斯様に申すと諸君のうちに不思議に思われる人があるかも知れません。しかし志が実現せられないということは、実はその志すところが未だ十分に深大ならざるが故であります。例えば大楠公の

建武中興の御精神は、公の没後六百年にして明治維新の大業となつて初めて実現せられたといつてよいでしょう。又孔子の志は、諸君も知るが如くその生前に於ては遂に実現せられなかつたけれど、しかしその精神は没後二千年の今日まで幾多の人々の心を動かしつつあると言えましょう。一人の人間が論語の一句を読んで深く心を動かされる時、そこに孔子の精神が生きているというに何の誤りがありましょう。

■死後にも生きる

このように真実に生きた人の精神というのは、よし形の上ではその生前十分には途げられなかつたとしても、必ずや死後多くの人々の心に火を点じて燃え広がるものであります。諸君、諸君は果してこれまで死後に生きんとするの壮志を懷いたことがありますか。そもそも人生の意義は、この肉体の死した後にもその精神が多くの人々の心を照らすに至つて始めて実現せられるというべきであります。ですからもしこの肉体の消え去ると共にその人の全存在が消え去つてしまふならば、人間の存在も犬猫のそれと何等選ぶところはないわけです。

ところが諸君は今日まで果して真に死後に生きんとする大決心を打ち立てたことがありますか。諸君の寿命は先づ大体今後五十年にして大部分の人は消え去るといつてよいでしょう。(この時又笑う者あり。六十年経つたならば、恐らく諸君のうちに生き残る人は一、二割に

過ぎないでしょう。更に十年を加えたならば、恐らく諸君の全部はこの地上よりその肉体を消し去るのである。更に私に至つては、残すところ今後僅かに二、三十年に過ぎないので。否恐らく三十年とは生きられますまい。三十年たつとモウ七十を越すんですから……。それはともかくとして、我々人間は必ず死ぬものであり、人生は永遠に二度と繰返すことの出来ないものであるということは、古今かつて一人もこれより漏れた例外のない人生最大の鉄則であります。諸君は今この人生最大の鉄則に向かつて、如何に我が身を処せんと覚悟して居るのでしょうか。これに対する覚悟なき者は、その無自覚なる点に於てまさに犬猫と何等異るところないと言えましょう。

■真実の生活を

然らばこの鉄則を打ち越えるの道如何。即ちそれはその精神に於てこの肉体の朽ち果てた後にも尚生きる道を求めるの外ないでしょう。では如何なる精神がその人の死後も猶生延びるでありましょうか。今これを一口に申せば、只真実心のみがよくその肉体の死後にも生き延びるのであります。かくして諸君は今後如何にしたならば我々は真に偉大なる真実を以てこの人生に生きる事が出来るかという大問題に向つて、その全力を傾けて考えなければならぬと思ひます。これ所謂立志の問題に外ならぬのであります。そもそも古来苟も偉人と呼ばれる程の人々は、何れも偉大な真実に生きた人々であります。諸君はこれ

まで修養ということを、何かおめでたい去勢された人間にでもなることの如く誤解していたのではないかと思います。しかしそれは大なる誤解であります。古来精神的偉人といわれる様な人々は、真実心を以て力強くこの人生を生き貫いた人であります。その意味から申せば言葉はやゝ変であります。孔子等という人は古来人類の中で最もおめでたくなかつた人間といつてよいでしょう。大楠公の如きも世間に所謂おめでた屋等といわれる人々から、如何に懸隔した偉大真実なる大人格であつたかは、今更らいうまでもないことでもあります。そこで諸君は成程本校に入つた以上、一応将来国民教育者たるの志が立つての事に相違ありますまいが、しかし諸君は「国民教育者として如何にして不滅の人間になるべきであるか」。この志は恐らく諸君の中の何人も未だ十分には打ち立て、いないに相違ない。明日からの諸君の一切の勉強と修養とは、まさにこの生涯の最大眼目の上に十字砲火の如くに集中せらるべきであります。

今も申して来たように、人間意気地なしでは修養など思いも寄らぬことです。諸君がこの学校を出ただけで真の教育者になることは、大学の法科出の者が知事などになるより遙かに六ヶ敷いことです。諸君！私の申すことが分りますか。この辺で又クスクス笑う者あり。先生憐むが如く眺められつつ少しもお叱りにはならない諸君！眠っている魂を呼びさまし、その心に火を点する様な偉大な教師になるというこ

とは決して容易なことではありません。人間の死の直前に至つて如何に煩悶してみたとして今更どうなるものでもありません。マア人間も差し当つては自分より上の学歴をもつた人々が、心服して仕える位の人間にならねばなりませんまい。しかしこの程度のことすら実際には仲々容易ならぬことでもあります。或る意味ではその様な人は人生の水火の中を潜つて来ないと出来上りません。それには差し当つて先づ偉人の伝記を読むことです。今日授業の始めに赤彦のことをお話ししたのも謂はばその第一歩なんです。(池田顯雄記)

編者記す。筆記者池田顯雄君は昭和十六年晩秋ツロモン海戦に於て名譽の戦死を遂げらる。嗚呼。

(修身教授録三) 昭和18年9月1日同志同業社刊)

「再軍備問題」(微言)

森信三

時節がら再軍備について時々意見を徴せられることが少くない。そうした場合私は「どうも私にはまだ何れともハッキリ決定するに到つていないのですが!」と答えている。

○すると大抵の人が一瞬物足りなさそうな顔をする。中には「何というあいまいな煮え切らない人間だろう」という表情をする人もある、それは一応尤もだと私も思う。

○だが正直に言つて現在までの処私はこの重大問題に対してハッキリと可否を断言しうるまでに至つていないのである。従つて愚直な私としては正直に「まだハッキリとは分かり

ません」とハッキリしない理由を言う他ないのである。

○問題を単に本質論の上から言うのであれば戦争の罪悪性が、これほど明かになった現在に於ては一議に及ぼす「絶対に不可と断言するを揮らない。

○ではなぜ私は今日までの処ソウとハッキリしない断言しないのであるか。けだし問題は必ずしもそうした本質論だけで片附くほどに単純な論理の問題ではないからである。このことは口に平和主義を力説しつつある米ソ両国が今日何をしているかを見れば明かである。

○現在米ソ両国がその膨大な軍備の解体に向かつて努力しつつあるというのであれば問題は無い。しかるに現実はまだしく正逆の方向に向かつて進みつつある。すなわち世界勢力を代表しているこれら両大国が、その口に唱える処と、手をもつて実行しつつあることが全く正逆である処に問題の深さと重大さがある。

○かくして再軍備の可否の問題は、単なる戦争可否の本質論ではなくて、それが結果的に見て、われらの民族ならびに人類にとつて何れが果たしてプラスとなり、またマイナスとなるかという観点から考える外無いと思う。

○ところで今仮りに再軍備を肯定するとして、それによつてわが国への侵略軍を…その際わが方の人的損傷の問題はしばらく別としても…果して防ぎ得られるものかどうか、何人にも保証はできないであらう。

○仮りにまたよく防ぎ得たと仮定しても、今もいうように人命の殺傷という実に絶大な犠牲を払わねばならぬ。しかもかくして防ぎ得たとして、それによって得られるものは畢竟「現在秩序の維持」ということであろうが、現在この社会秩序というものが果たしてそれだけの絶大な犠牲を払ってもなおかつ維持しなければならぬものであるかどうか。これまた簡単には断定的し得ない問題だと思ふ。

○これに反して無軍備の場合を考えてみるとして、その場合人々の最も恐れるところは所謂共産主義によつて侵略されるということであろう。一部の人はそうした危険はないと言ふが、果たしてそうしたことが、そう簡単に言えるものかどうか。これまた決して安易な断定は下し得ない重大問題であろう。

○だがその場合もし文字通り無軍備無抵抗に徹底したとすれば、少なくとも人命の死傷だけは防ぎ得るであろう。しかしその場合実現するであろうところの共産主義下の現実政治が果たしてどのようなものとなるかは、これまた容易に断定的なことは言えないであろう。

○こう考えてくるとその名称の如何に拘らず実質的な再軍備を肯定する場合は、多くの同胞の殺傷という不可避免的犠牲を払つた上になお勝敗が明かでないという危険があり、同時にまた無軍備の場合に來るものとしては共産軍の侵入に伴う共産政治の強行ということになるであろう。

○要するに突きつめた処を端的に言えば再軍

備賛成論者は米軍の指揮下に屍を戦場に曝らすだけのあきらめがついた上でなければならず、また反対論者はその非戦論のために牢獄に入れられるだけの覚悟が決つていなければならぬと言ふことであろう。

○私はこの数年來「世界史は神曲であり、この地上に於ける人類のもろもろの葛藤は神の眼からは絶大なる喜劇である」との真理に対してひそかに自己の生命を賭けても曲げ難い感じを抱いて來たが、再軍備の問題についてはそれが果してわれらの民族にとつて幸なりや不幸なりやについては未だ生命を賭けるまでに明かになつていないというのが現在の私の真情である。

○これに対し人あつて若し「そんなことでよいのか」と言われるとすれば勿論これでよいなどと思つていないことは言うまでもない。只愚直な私としてはこうした歴史上未曾有の難問に対し、せめて自分だけの責任の負えるまでの見解に到達したいと思うが、それすら現在までの処まだ不可能である。しかしてこの場合責任を負うとは事柄の性質上生命を賭けるということの外である。(開題 昭和27年4月号)

あとがきに替えて

再軍備の問題が当時、国論を二分したことは想像に難くない。今日で言えばさしずめ原発問題か？森信三先生が逡巡されたことは愚生にはよく分かる。今日の原発問題に関して森信三先生今日在りせばどう仰言るだろうか。愚生は世界の趨勢と資源無き日本の現状と、未だ代替燃料のメドが立つていない現状に鑑みると、日本こそが重大事故を教訓とした原

発関連の問題課題を整理克服しつつ、世界に安全な原発エネルギー技術を提供し、残存する廃棄物の処理についても1日も早くその解決策を世界に提案する立場であると考え。必ず人類はこの原発問題をクリヤーしないと同じ地球号に乘る人間として、来世の安心を得られないからである。また森信三先生の立志論はこれから伸びていく若人の芽を、真摯に、あるべき姿に導く小中高の教師必携の訓言であろう。(29日二繁)

第122回「かよう会」のご案内

日 時 平成25年 7月16日 (火)

18時30分～ (毎月第三火曜日原則)
場 所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686

交 通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。

テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円 (大きな書店で購入)
7/16日 情熱
8/20日 三十年
9/17日 長所と短所

参加費 1000円

〒633-0003
桜井市朝倉台東一丁目五二八-八九
TEL FAX 074-451-3422
E-mail: hji@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushin/

臂 繁 一 一 発行